

2019年1月23日提出

「道南地域のユニバーサル化プロジェクト」報告書

I 目的・背景

本プロジェクトは、学生が北海道ユニバーサル上映映画祭の運営スタッフとして主体的に関わることを通して、ユニバーサルデザインの考え方や地域の現状と課題を理解し、それらの課題の解決にかかわる取り組みである。また、企画・運営に関わって得た経験や学びを踏まえて、問題解決を目的とした組織運営の在り方を学ぶものである。

北海道ユニバーサル上映映画祭は、2006年から北海道北斗市において始められた取り組みであるが、上映作品に音声ガイド、日本語字幕、ミュージックサインを付けて上映する映画祭である。それは、年齢の老若、障害の有無、言葉の違いに関わらず誰もが必要とする場所・施設や情報に容易にたどりつき利用できる、というユニバーサル化に向けた1つの試みである。また、多目的トイレが完備された段差のない会場を使用し、中央席部分に車いすスペースを確保し、託児所サービスを設けるなど、ユニバーサル環境を整備し、障害の有無にかかわらず誰もがともに参加でき、誰もが様々な形で映画を楽しみ、感動を分かち合うことができるようにしている。そのほかにも、会場で配るパンフレットには点字表記のものや文字を拡大したものを準備し、司会進行には必ず手話と文字通訳をつけ、会場の移動にはガイドスタッフを配置したうえで実施している。

II 年間スケジュール表

日程	内容	会場
2018年6月17日	映画祭 in 七飯	七飯町文化センター
2018年9月22日	映画祭 in 北斗	北斗市総合文化センター かなで〜る
2018年11月18日	映画祭 in 函館	函館市総合福祉センター あいよる 21

- ・毎月第2水曜日…実行委員会（場所：教育大学内講義室）
- ・毎月第4月曜日…事務局会議（場所：カフェやまじょう）

III 活動内容（2017年10月～2018年11月）

- ・実行委員会（毎月第2水曜日）と事務局会議（毎月第4月曜日）に参加。
- ・週1回、学生間の話し合いを実施。

【2017年】

11月 前期生が主体となって実施した第12回北海道ユニバーサル映画祭函館上映会に参加。

【2018年】

1月 地域プロジェクト中間発表会で発表。

- 6月 第13回北海道ユニバーサル上映映画祭 in 七飯に参加。
- 6月 第13回北海道ユニバーサル上映映画祭 in 七飯のシンポジウム企画・運営・登壇。
- 7月 地域プロジェクト最終発表会で発表。
- 9月23日 第13回北海道ユニバーサル上映映画祭 in 北斗（於：北斗市総合文化センターかなで〜）に参加。
- 11月18日 第13回北海道ユニバーサル上映映画祭 in 函館（以下、詳述）に参加。
- ※第13回北海道ユニバーサル上映映画祭 in 函館

日時：2018年11月18日（日曜日）

会場：函館市総合福祉センター あいよる 21

内容：エリック・ラルティゴ監督作品『エール！』（2014年）を上映し、その後、『北海道意思疎通支援条例・手話言語条例』道民フォーラムを北海道庁と共同開催した。道民フォーラムでは、「こんなところが暮らしにくいぞ 北海道 ～インクルーシブ社会実現への処方箋～」と題したトークセッションを企画・実行した。手話言語条例の制定を切り口として、インクルーシブ社会に向けての北海道の現状や改善点、今後の方針について、道庁の方や障害当事者の方にお話を伺い、会場と質疑応答を行った。

備考：今回の函館の映画祭では、来場者数を増やすため、新しい試みとして海外の作品（仏映画「エール！」）を選定した。この映画は、主人公のポーラ（歌唱力を評価されている女子生徒）と聴覚障害を持った家族、友人や先生との関係や交流を描いている。障害の有無を超えた理解を示す映画として選定した。

IV 総括と課題

本プロジェクトは今回で第3期を迎えた。

昨年度（第2期）から引き継いだ課題は、準備段階において、広報担当や音声ガイド、ミュージックサインの担当者の負担が大きかったという反省である。それを踏まえて、第3期では、まず、それぞれの役割を精査し、個人の役割ができるだけ均等になるように役割を分担することによって、早い段階からスタートをきることができた。

七飯、北斗、函館それぞれの映画祭で、各自の役割を交代してみるという工夫をしたことによって、ユニバーサル上映映画祭がどのように運営されているのか、それぞれの役割がどのようなものか、について身をもって経験することができた。

函館映画祭で上映した『エール！』の劇中には、歌を歌うシーンが多数あったので、その歌詞の手話をミュージックサイン担当者が作成したが、覚えやすかつ楽しんで行うことができた。

反省点としては、会話等は日本語吹き替えになっていたが、歌がフランス語のままであったため、視覚障害者の方から「点字の歌詞カードが欲しかった」という声をアンケートで数件いただいた。このことから、「誰もが感動を分かち合うことができるようにする」ためには、視覚障害者の方向けに点字の歌詞カード作成する必要があると考える。

もう一つの反省点は、函館での映画祭企画の内容の決定が遅れたために、チラシ・ポスター作製担当者の負担が大きくなる結果となってしまうことである。映画祭企画の内容の決定が遅れた原因としては、ゴールまでの見通しを立てていないまま話し合いを行ったこと、授業時間以外の時間を活用できなかったこと、が挙げられる。準備なしに検討を開始するのではなく、見通しを立ててから始めるべきであった。さらに、進捗状況に応じて、空き時間を有効に活用して行く必要があった。

上映後の道民フォーラムでは、多数の参加を得た。ただ、学生の参加や当事者以外の参加数が少なく感じられた。学生等に参加を促す取り組みがもっと必要であった。広報活動として、チラシ・ポスターやラジオでの告知を行って積極的に努めたつもりであったが、はたして十分であったのか。大学や企業への広報活動アプローチに課題が残った。

フォーラムでは、学生から北海道庁に質問が飛んだ。条文の『道民』の枠組みに障害者が含まれていないという矛盾点を衝いたり、聴覚障害当事者とその関係者以外の人びとが手話を学ぶ機会は確保できるのかという疑問点を突きつけたりする内容だった。リアルタイムで福祉や差別の問題などを学んでいる学生ならではの、の視点が十分に反映されていた。

今年度の活動を通じての成果としては、以下の点を挙げることができる。

第一に、共同作業とはどういうものか、について身をもって学んだことである。

ユニバーサル上映映画祭には、いろいろな人が関わっている。国際協働グループと地域政策グループに属する私たち学生、そして長年上映祭を手掛けてきた地域の人たちだ。学生福祉やユニバーサルに関する基礎知識・経験にそれぞれ差がある中で、協力していくことの大変さ、一つのイベントを作り上げる際に全員と連携をとることの難しさ、担当したこと・担当したものが映画祭においてどれだけ大きな影響を及ぼすのかを実感し、その責任が重大であること、について学ぶことができた。

第二に、今までは接する機会の少なかった障害者の方々と実際に関わり合ったことによって、映画を満足して観ることが容易なことではなく、配慮のないことが障害者の方にとってどれだけ不自由なことなのかについて、深い認識を得たということである。

『ユニバーサル』『バリアフリー』という言葉は広まっている。にもかかわらず、障害当事者とその他の人々がともに暮らしやすいと感じられるような、設備や教育環境が整っていない現状は大きな問題であると感じた。

このプロジェクトに参加したことで、障害者が、手助けされることで実は私たちに気を遣ってしまっていること、視覚障害者にとって点字ブロックがどれほど大きな助けになっているのかということ、身体を動かすことによって表現できる音があるのだということ、などを知ることができた。実際に見て、聞いて、体験することが相互理解への一歩になるのではないかと感じた。

V 地域からの評価

第13回北海道ユニバーサル上映映画祭 in 函館の来場者からは、下記の意見が寄せられている。

- ・「今後も続けてほしいです。」「教育の中で手話や点字を取り入れていきたい。」「とてもよかったです。次回も参加します。」「字幕のある映画を観るのは初めてだったので新鮮でしたが、楽しんで鑑賞できました。」「今回のミュージックサイン、今まで観てきた中で一番レベルの高い表現だったと思います。音声ガイドも視覚障害がなくても映像の邪魔にならないタイミングで、映像に奥行きができました。どちらも練習の成果ですね。」(アンケート結果より抜粋)

映画祭来場者のアンケートでは、肯定的な感想や意見が多かった。この活動をどのように継続していくかが課題として考えられる。

Ⅵ メンバー一覧

担当教員：山岡邦彦、廣畑圭介

国際協働グループ：伊藤茜、山田千耀、伊五澤美南、佐藤柚香、古坂桃、富永夢菜、
岩崎柚、森本ひとみ

地域政策グループ：湯澤京加、喜多村ひなの、堀川美琴、中村百恵、山本夏奈子、黒澤怜
中村瀬奈、小関そよ香



第13回北海道ユニバーサル上映映画祭 in 函館（2018年11月）道民フォーラムには学生もファシリテーターとして登壇（写真左 ←）した。

挿入曲や背景音など、映画の画面字幕では伝えることができない音や雰囲気、身振り手振りや表情で表現するミュージックサイン（写真右 →）は練習が結構、大変だ。

